脳性麻痺の方の下肢機能の維持について
～自走・下肢運動を通して～

18CC16　　ニルヨック　アナンヤ

Ⅰ．はじめに

障害者支援施設とは、困難な立場にある障害者の方一人一人の人権を守り抜くために保護を行い、日常生活を行うと共に、地域生活への移行、自立に向けて支援を行う施設である。介護実習Ⅲでは障害者支援施設で、脳性麻痺を患っている A 様と出会った。A 様は自室において　　畳で生活され、膝立ちで移動する方であり、フロア内の移動は車イス生活をされており、下肢機能の維持のための介護計画を立案した。

Ⅱ．実習先種別・実習期間

障害者支援施設

2019 年 6 月 24 日～7 月 23 日（23 日間）

Ⅲ．事例紹介

A 様　40 歳代　男性

1. 家族構成及び生活暦

実父は自宅にて生活をしているが、実母は他界されている。

2. 入所に到った理由

2006 年：精神的に安全し、父親との関係も改善した。

2009 年：主介護者の父親が病気により、介護困難となり、障害者支援施設に入所。

3. 健康状態

主な疾患は脳性麻痺

4. 日常生活の状況

（1）移動

リクライニングを使用しているが、時々車椅子で自走を行う事がある。床面を膝立ちが見られる。

（2）排泄

排尿時は、尿器を使用しているが、トイレ希望時は、リフトを使用する場合もある。

（3）コミュニケーション

他利用者と話しているところは見られないが、文字盤の使用や表情で、職員とコミュニケーションを図っている

（4）性格

優しく、穏やかな方であり、勤勉な方である。

(5)1 日の過ごし方

テレビの前でボーっとしている、人を見ている、車椅子に座っている

Ⅳ．介護の実際

1.課題の発見と分析

A 様は脳性麻痺があり、車椅子で日常的な生活を過ごされている。食事、入浴は全介助が必要であるが移動の車椅子は自走されている。また、自室では膝立ちや姿勢維持のために下肢の機能を維持することはA 様の生活にとって大切なことであると考えられる。

2.介護上の課題

下肢の筋力が低下し、拘縮の恐れがあるため下肢を使った運動を行う必要がある。

3.介護目標

長期目標：残存機能を活用し、下肢の維持を図る。

短期目標：下肢の筋力を使った運動を行うことができる。

具体的援助内容：車椅子の自走を行い、足でボールを止めるなどの運動行う。

Ⅴ．実施及び結果

・7 月 9 日　車いすで自走を行う際に 3F フロアで 40 分間、自走を行い、集中されていたが、姿勢が崩れるため、4 回程度姿勢を直すことが必要であった。

・7 月 13 日　ボールを止めるレクリエーションを実施した。ボールを止められたが、スピードが速いボールは止められなかった。ボールを活用することで、さらに下肢機能維持が図れるのではないかと考えた。課題として声を掛けや見守りが必要であった。

Ⅵ．考察

A 様は日中移動することなく、自室で過ごす時間が多くみられる方である。自室の中で膝立ちを移動することがあった。今回、下肢機能の維持のために、下肢を使用した運動の計画を実施した。柳澤ら[1)]は、「脳性麻痺の場合、生活環境と支援者の変化が、身体面の諸機能の低下に連動するので、このことを念頭に置いて支援のあり方を検討する必要がある」と述べている。このことは、利用者と支援者が信頼関係を築きながら支援することが重要であると推測する。

Ⅶ．おわりに

今回、脳性麻痺の方を対象とした介護計画を立案した。A 様の生活が良くなったかは分からないが、脳性麻痺に関する様々な書籍をみることで、支援者の学びに繋がったとともに利用者に対しても、良い支援に繋がると考えられる。

参考・引用文献

1)　柳澤信夫 監修(2016)　見て知るリハビリテーション医学 丸善出版株式会社 p.163.